

いう関わり方をしているのかということ、ビデオを見ながらでも良いが、インタビューの積み重ねを通じてみていくと、保育者は保育の何を見ているかということが結構みえてくるのではないかと。

d. (合同保育実施園で長時間保育を受けている子どもが、短時間で降園する子どもがいることに対して、「寂しさ」を抱いているという実態があり、さらにこれに対する十分な配慮がなされていないとすれば、保育所の本来的機能を果たしていないということであり、・・・、に対して) これはすごい指摘だと思う。それぞれの保育園が合同でどういう方針をもって、いつも保育者はどういう関わり方をしているのか、園長が指摘したり、研修したりしているのかまで関係してくる。これらの指摘を踏まえた保育の機能というのは、調査対象となって協力していただいた保育園にフィードバックされたとき、是非どう考えておられるのかお聞きしたい。

②継続研究に対する示唆

a. 保育者の子どもへの関わりをみるためには、どちらかというと、観察とともに、保育者へのインタビューをした方が良い。保育者がどんな思いでどういう関わり方をしているのかということについて、保育者と一緒にビデオを見ながらでも良いが、保育者とのインタビューの中で、保育者は保育の何を見ているかということが結構出てくる。半日組と全日組が、グループ化していると、どうしてだろうかと日頃の関わりを保育者自身がビデオで見たなら、むしろ保育者は気づくことがあるかもしれない。ビデオを見て、第三者としての皆さんがこういうふうに見えたんだけど、こういうことがグループ化に関係している

のではないのでしょうかと言ってみる。子どものグループ化がダイナミックスの関係の中で必然的に出ているのなら、それをもっと客観的に捉えた方が良い。保育者の皆さん方のかかりの人たちが、これがよい保育だと思っているのなら、それを出してもらおう。保育者の方とのインタビューの中で、ビデオを基に、私たちはこういうふうを受け止めたのですがどうでしょうかと聞くことで、結構深まる部分があるかもしれない。

b. もう一つ事例研究もあり得る。合同で保育をしているところだけに絞って、事例研究をしても良いと思う。Aちゃん、Bちゃんという事例よりも、その保育園での保育の関わりという事例、もちろん、その中で、誰ちゃんというとうことを中心にやっても良いと思うが。

c. 保育園数の上で研究上問題がないということなら、むしろファクターのクロス分析をする場合のファクターをどういうふうに取り上げるかということになるが、それを統計的にデータ解析をする。さらにまた、ビデオを撮るのは大変なので、前回の調査で撮ってきたビデオを基に、保育者とのインタビューをする。どういう保育の仕方をしている人かは、かなり大事であり、今後はそれを深めることも重要でしょう。

事前に充分話し合って了解を得て、何人かの保育者をずっと追う、何人かの子どもをず

っと追う。その保育者がその保育園の代表として見えるということなのだが。幼稚園型の保育をしている誰か、保育園型の保育をしている誰か、ということでビデオを撮っておくと説得力が出てくる、2, 3人で見事に出てくるかどうかは、わからないが。また、もし子どもの群あそびが、グループ化されているならば、その両グループをずっと追う。そうすると本当に見えてくるのではないか。そして、そういう子どもたちにソシオメトリーをとったりして、どういうことですかごく気があっているのか、どうして遊びたいのかということも見ていくと、午後ずっと長く一緒に遊んでいるのはなぜかということが、本当にみえてくる。

ビデオのセッティングだが、昼食が始まる前に、半日で降園する子どもは、別の部屋で遊びながら母親の迎えを待つなりバスで行くなりすると思うが、そういう場面を撮る。午前中保育の終わり頃とか、ある夕方ごろとかに、子どもがすごく泣きじゃくったり、けんかが増えたりという調査があるが、夕方近くのある時間帯を1時間撮って分析するというのはどうでしょうか。比較的そういうトラブルが見られたりする時期、時間帯の流れを1時間撮って、なぜ起こっているのか、保育者とどう関わっていたのか、子ども同士はどの程度ダイナミックな関係があったのか、とかについて分析する。比較的よくトラブルなどが見られる子どもに、少しケース的アプローチを試みる。何かトラブルがあるときの保育者の関わり方を見してみるなどである。

④合同保育の進行に対する対策と目的

a. 幼稚園教育は、義務教育ではないが、日本の堅牢な学校教育体系の特色が影響している面も見られる。言葉も早く覚えたり、英語までやってくれる、ひよっとするといい小学校、中学校に入れるとなると、幼稚園だけでなく、保育所、幼稚園と保育所の合同園も、巻き込まれてしまうかもしれない。そうすると、子どもの育ちという点での今一番重要な部分、すなわち、本当の意味でののびのび健やかにという部分が大切にされないという懸念がある。これは専門性の問題で、3年、5年で変わらないかとは思いますが、私たちも主張して、教育体系をもっと生活教育重視の方向に変えていくことにした方が良いと思う。

b. 早期教育イコール一斉強制管理教育がますます浸透するという心配があると思うが、今はないけれども、幼稚園が15対1ぐらいの状況になるよう、私たちが主張して良いのではないかと。家庭養育が不十分で、親御さんだけで子育てができない中で、社会的親の重要性を強調したいと思う。極端なことを言えば、0歳から社会的親が関わっても良いと思う。そこで一番力を発揮できるのは保育園であり、その力量があると思う。多分スタイル1（幼保同一クラス、幼保の保育時間同一）、スタイル2（幼保同一クラス、幼保の保育時間が異なる）スタイル3（幼保同一敷地、幼保別クラス、保育内容同一で一定時間を日常的に合同で保育）の合同保育はずっとあると思うが、スタイル1がどういう形で増えていくかだが。保育の対応から言えば、あり得ると思うので、あまりにも条件付きになっているが、私は、結論的に言えば、スタイル1の合同保育に反対しない。

⑤幼保一元化についての考え

a. 制度上の一元化には2つのタイプ、すなわち、統合型と年齢区分型がある。統合型というのは、0歳からすべてに渡って一つの行政省庁が、責任を持つということである。また、年齢区分型というのは、ある年齢段階でその区分をする、例えば、3歳未満まではある省庁が責任を持って一元的にやる。4歳以上になれば、別の省庁が責任を持つ、これも一元である。皆さん方がこの研究をして積み上げているような、保育環境の一元性というのは、一元性の重要な側面として、あまり受け止めてない人がいるかもしれない。制度で一元化されたら、がっちりなってしまうと思う。その時、統合型、年齢区分型とがあるが、私は、3歳児で区切りとする年齢区分型の一元性を図っていくのがよいと思う。

しかも、その場合は先に述べたような生活重視（福祉重視）の教育が前提でなければならない。養成も専門性も一元化したいと思っている1人である。このような状況で、半日だけ保育を受ける子どももいれば、全日保育を受ける子ども、あるいは合同も単独もそういう状況の中でも何が大切かということで保育士がしっかりやっていたら、今の時代は、家庭養育よりずっとプラスのものを子どもに提供できるかなと思う。

幼稚園スタイル、保育園スタイルという違いのない保育を求めても良いと思う。基本的な躰とか、あるいは言葉とか、環境とか、今の5領域の基本的な部分をたくさん子どもたちがいる中で一緒に学び合っていく、同じ年齢や同じような状況の時に、相互に刺激し合っていく。午前中の幼稚園型というのは、ある種の秩序と集団を背景にした、重視した遊びといっても良いのでしょうか。午後の保育園型といわれるものは、保育者がみんな親代わり、お姉ちゃん、お兄ちゃん代わりで良い。幼稚園教育要領が範囲としている段階くらいからは、子どもは十分に教育に応えられるわけで、子どもの発達のニーズとしても大切である。3歳未満児に対しては、朝から、お父さん、お母さん、お姉ちゃん、お兄ちゃん代わりで、じっくりと関わる。時には、合流で良い、そういうところに、小さな子どもたちが教室に入っていったり、今度はそのクラスからきて一緒に遊んだり、午前中はいろいろあっても良いと思う。

b. スタイル1（幼保同一クラス、幼保の保育時間も同一）の様な園が普及するということになれば、午前中をいわゆる幼稚園スタイルの保育をして、昼食を摂ることを前提にして、昼食を食べるぐらいから保育型スタイル、突っ込んで言えば、家庭型スタイルというのが一番基本にあり得ると思う。

もし、半日全日一緒の合同保育ということになると、午後の方が子どもの人数が少なくなるので、残っている子ども達が寂しいというよりも、そこでもっときめ細かく少人数の対応ができ、欲求不満のはけ口も充分叶えられるだろうし、子どもが少ないほど家庭的で少人数型の方向で保育ができる。

(3) 森田明美氏

①前回の調査研究に関する意見

a. 気になったことは、一元化しようとしてその中で一番ハードルが高いのは、保育者の意識である。これはクロスすれば出てくるのではないか。一元化に抵抗しているのは概して保育者である。合同保育をしているかどうかということによる子ども達の意識の差はほとんどなく、子ども達、親、保育者、行政の順に無理解が強くなっているように思う。

b. 前回の調査は、幼保は違うものという発想でスタートしている。保育園では、養護性が余計に必要というのは、私もそう思う。が、余計に必要だということもまた、一律に議論してしまうと、それでは幼稚園の子ども達に養護性が不必要なのかということ、そうではないと思う。実は今の幼稚園の子ども達、例えば公立幼稚園の中には、預けられるのはここだけというような世帯もたくさんある。働く場がない親に育てられ、経済的にも精神・身体的にも養護性が強く必要な子も多い。

c. この調査の中に、もう一つなかったのは、親たちの抱えている生活環境みたいなものに、幼保の差があるのかということである。経済的子育ての力、あるいはその支援を受けられる親族だとか、友人、知人なんかをネットワークとしてもっているかという点で、幼稚園の親達でも保育園の親達でも、非常に苦しい層とある程度ゆとりのある層とに、二極分化が強まっている。

四国のある自治体では、幼稚園の親もほとんど働いていた。そこでは公立幼稚園に行っている子どもが夏休みに、自営業だとかパートの人達のところに遊びに来てしまう。だから、その人達の家が大変な状況になってしまう。だから、夏休みが憂鬱だという親がいた。何故この人達が保育所に預けないのかということ、保育所の保育料の方が高いから、安い公立幼稚園に子どもを預けているわけだ。そうすると、この子ども達を、一体どういうふう
に地域の中で安全に育てていくことができるのかという問題が出てくる。幼稚園を何故選ぶのか、公立幼稚園のあり方が一番大きいターゲットになっている。その中で行われる一元化の議論は、いまお話したようなことの中に起きている。

d. どういうところを全体像として見通しながら、何をやろうとしているか、自分たちの限界みたいなものも押さえておかないと、おそらく、この研究が予期しないような使われ方をされてしまう。

これ(森田明美著 『幼稚園が変わる 保育所が変わる -自治体発:地域で育てる保育一元化』 明石書店 2000)は、公的なシステムをどう作り上げるかというところでの提言であるし、こちら(前回の調査研究)は、要するに幼稚園の保育所化のところに対するある種の危険を言っている。だから、この二つは、今の一元化という問題に関して言えば、両極にある。その両極にある部分の片方(前回の調査研究)で、公立を2園くらい入れているので、わからなくなってしまうのではないか。だから、幼稚園の保育所化ということにはっきりとターゲットを絞り込んで、その幼稚園の設置基準の中で、今の子ども達

のケアができるのかという議論設定にしていれば、簡単に現状も課題も明らかになると思う。そういうことをしないと、研究が違う方に使われてしまうのではないか。

e. 合同保育では、保育時間に長短の差があるが、この時間差というものに対する保育内容は、これまでは全く研究されていない。そういう段階で、今の合同保育の保育内容について、保育者だけに責任をかぶせても仕方がない。保育内容がもっときちんと議論されないと、合同保育はいいか悪いかという議論だけでは、ものすごく荒っぽい議論という気がする。

f. 幼稚園児が先に降園することについて、保育園児はどういうふうに感じているのかを保育者と保護者に別々に尋ねたことについて。(保育者と保護者に別々に聞いてみると、はっきりと寂しいと感じているという比率は高かった、という結果に対して) 私が知っている滋賀県内の取り組みでは、保育園児に聞いても、子どもは全然感じていないという結果が出ている。卒園児にヒアリングしてみるという方法もあるのではないか。

これ(子どもが寂しいと思うこと)は、保育の質の問題である。夜10時までの保育をしている保育園だったら、4時に帰る子どもと、10時までいる子どもとの時間差は6時間あるが、この差を感じさせるような保育をするのだったら、保育の質が悪いということ片づけられてしまうことである。保育の質の問題を論じる必要があったと思う。

②継続研究に対する示唆

a. 私立幼稚園の安易な低年齢児保育、長時間保育に対する警告を言いたいのであれば、是非その保育の中で何をやればプラスになるのかということを見つけ出して欲しい。何を大事にしなければならないか、何をやってはいけないかということの研究してほしい。急速に幼稚園の保育所化が進む現代であるからこそ、合同保育によって身に付くこと、身に付かないこと、それから保育者の意識(合同保育に反対か賛成か)によって子ども達の何が変わるのかを拾ってもらいたい。それをやれば、保育者論というところで、新しい知見が出てくるのではないかと思う。

b. 親の生活状況、保育者の意識、公私、いつ頃合同保育が始まったのか(時期)、合同保育を始めた時期の時代背景、合同保育を始めた経緯、子ども数の推移というものと長時間保育・3歳児保育・3歳未満児保育の3つの事への取り組みがどのように絡んでいるのかということを見てほしい。

c. 教育の質、保育の質ということの評価できるようなものがほしい。

⑤幼保一元化に対する考え

a. 合同保育を始めたところで、歴史があつて良いなと思うのは、徳島県の藍住町である。この自治体では、本当に子どものことを考えていて、幼保を年齢で分けている。ここは、20年以上やっている。和歌山県の白浜町では、4時まで保育している。福井県の松岡町

では、午後の部分はクラブ活動にして、地域の人達がボランティアで参加している。1960年代の交野市をモデルにしている白浜があり、白浜をモデルにしている松岡があるという循環化になっていると思う。これらはみな、公的な合同保育である。一つの仕組みを土台にして、次が変わっていく、自治体がそれぞれ変わっていくという形で、どういうふうに仕組みとして作り上げていくかということだと思う。自治体によって、また基礎自治体の中でもさらに地区によって子どもの数の減少に違いがある。加えて、自治体財政が厳しくなる中で、1969年代70年代の公立幼稚園や保育所の老朽化による改築問題が浮上している。その中でどういうふうに公的なものを残すのかという議論になる。自治体によって相当違う。

b. 行政の一元化、保育者の異動、子どもは原則一緒に合同保育が原則として必要だと思う。そうでないところは、大体民間委託して、公立は潰すというのが基本的なやり方だ。でも、二つを一つにするわけだから、やり方によっては、少なくとも人材はより有効に生かすことはできる。そして、子ども達は一緒に過ごすことができる。1960年代～70年代にかけて、たくさん幼稚園や保育所ができてきたが、今ここがみんな建物が老朽化して、建て替えの 때가きて、いろいろな問題がいきなり起きてしまっている。大人によほどの意識がないと、民営化するか潰して数を減らすという話になってしまう。

c. 公的な仕組みをどうするのかというとき、一つの考え方の拠り所は、地域の子も達を一つのシステムの中で育てていく、自治体として責任を持っていくという考え方である。過疎でそこしかないというようなところなら、一気に公立保育所だけという形にもっていったところもあるし、公立幼稚園というのを併設型みたいな形で残したところもある。時間をかけてその地域の中にあつたやり方というのを考えていく取り組みをしているところもあれば、公立で幼稚園と保育所を一つの仕組みの中に入れていこうとしたときに、具体的には保育所だけを残そうと思ったら、結局近隣の私立幼稚園に幼稚園を求めて通園バスで広域化したところに通うことになってしまう。そうすると、自治体の中で考えていた地域の子も達は地域で育てるのだというような主張というのが崩れてしまうことになる。これはその大元が崩れることになるので、併設型公立幼稚園として残すべきだろうということになり、その結果幼保の一元化をするという結論になっていくわけだ。地域の中で子どもが育つというのは、今非常に地域が壊れていると言われる状況の中で、保育所や幼稚園、あるいは小学校、中学校とバラバラな子どもと支援の現状を、もう一回就学前の子ども達の育ちの部分を連続して地域の中で考えるかということがとても重要である。そういう意味でその地域の子もを育てていくという思想を、もう一回具体化する方法としての一元化という試みを、実はこの本（前掲書）の中に、私は映し出したいと思った。

(4) 泉千勢氏

①前回の調査研究に関する意見

a. 合同保育にもいろいろなタイプがあり、それによって、親の希望も違うのだろうけれども、それらを一緒にしてデータを出してしまったので、傾向が読みとりにくくなったのではないかと思う。合同保育のタイプ別に、親の希望なり不安の違いが出てくるようなまとめ方をした方が良かったと思う。

b. 合同保育園は保育内容が幼稚園よりで、幼稚園を中心に展開されている。保育所の子どもというのは、24時間の生活の中のかなりの部分を保育園で過ごしており、一日の生活としてリズムがあり、そこを押さえ一日の過ごし方を考えなければならないのに、教育の整合性というところを中心に展開してしまっているのに、幼稚園の保育内容がかなり全面的に出ている。そういう意味で保育内容にかなりかたよりがある状況の中で、合同保育をやっているというところに問題が結構あるのではないかと感じた。そういう意味で、調査結果の考察にかなり共感するところもあった。しかし、それらは、合同保育という形態からくる問題というよりも、保育内容そのもの、保育のあり方からきている部分が多分にある。

c. ビデオの撮り方だが、据え置きで撮影したところに無理があった。保育者と子どもの関係、子ども同士の関係を撮ろうと思えば、撮れるところにビデオを置かないと見えてこない。合同保育の形態というよりも、保育の質ということの問題にしたときには、保育者と子ども、子ども同士がどういう関係を持っているかということを見ていくのが、非常に重要なポイントだと思う。

d. 保育の質、内容の問題というのは、合同保育だから悪いということではない。日本の保育内容、今の保育園の中には、合同保育をしていなくても同じようなことをやっているところがあり、そういう問題が出てきているのではないかと思う。保育内容のレベルの問題であるのだから、合同保育の形態が悪かったというふうな言い方では、ちょっと処理しきれない問題が残っているのではないかという気がする。

e. 保育者の関わり方も、合同保育だからというよりも、保育者一人一人の資質にもよる。コストを安くしようと思えば、回転を早くしてしまうので、質の良い保育者が残らない。その辺は日本の保育界全体の抱えている問題である。単なる保育形態だけではない。保育者の資質と価値観が影響してくるので、合同でやってもいい保育者なり、いい保育をすれば、いい形になってくる可能性はあると思う。そういう全体的な問題と絡めながら、見ていく必要があるのではないか。

②継続研究に対する示唆

a. 問題は、合同保育という形態からくる部分よりも、保育内容、保育のあり方からくるので、事例的にきちんとデータをとった方が良いのではないかと。

b. 今後どういうふうな形態を考えていくかということでは、原則として、何を守らねばならないのかを明らかにしていくのが第一ではないかと思う。

c. ビデオ録りするのなら、保育者と子どもの関係、子ども同士の関係をきちんと見ていくのが大事なポイントだと思うので、その辺を工夫していく必要があるのではないかと考えた。量でというよりもむしろ、事例研究で、朝から夕方まで一日、保育の中に入り込んで、典型的な事例に入り込んで撮らせてもらうということにすれば、できるのではないかと思う。

d. ビデオでなくても、エスノグラフィーで園の中を浮き彫りにする。ある程度子ども達とラポートをとり、観察しながら記録を取っていく。克明にいろいろ記録を取っていくと、ポイントになるところが出てくる。今何が保育園の中で起こっているかという、そういう事例的な研究が意味があるのではないかと思う。

e. 地域の独自性があるので、合同保育の形態だったら、やはりそれぞれの地域の必要性が生じてきていると思うので、そういう地域性ということと絡めながら研究していく必要もあるのではないかと。なかなかそれぞれ、アンケート調査だけでは見えてこないのではないかと。今後の研究のあり方としては、事例研究をまず考える。ビデオで撮っても良いし、エスノグラフィー的な方法でも良いけれど、とにかくそれぞれの園が何故そういう保育をするのかという必要性から始まって、実際にどういう保育の内容をしているかということは、入り込んでみてみないとわからないところがあると思う。

f. 合同保育の問題だけでなく、日本の保育全体の問題としても、よりよい保育というのは一体何なのかということまでを追求していくような研究も、私たちの責任としてあると思う。やはり、これからは、地域（コミュニティー）の中の社会資源の一つとしての保育のあり方、その地域に馴染んでいくような保育、そういう視点を採り入れた取り組み、家庭にいるお母さん達とも交流できるような、そういう地域づくりの中にこの保育をどう位置づけていくかという問題として、研究していくということも必要ではないか。

③合同保育の輩出を放置してもよいのかの可否

a. 何故わざわざ一緒にして、子どもの数を多くして合同という形をとらなければならないのか。できる限り小さな保育園で、何人以下でこれ以上子どもの数を多くしてはいけないとか、クラスの定員を何人までとか、原則をはっきり作っていくべきだと思う。今、世界の流れとしては、もう20人単位だ。スウェーデンでは、15～16人が一つのクラス集団として、5人の子どもに対して1人の先生がついていて、1クラスに3人くらいの先

生がいる。3歳未満だと、5対2の割合で保育者がつくことになっている（地方分権で多少自治体間に差は出てきているが）。小さいクラス単位で、やはり一人一人の子どもをどれだけ見られるか、結局何を大事にするかということである。

b. 日本の幼稚園も保育園も、4、5歳児は1クラス30人、35人に対して保育者1人で、世界の水準から見てもひどい状況にあり、一斉保育にならざるを得ない。子ども一人ひとりをしていねいに見られない。そういう問題があるので、少子化になってきて、子どもが少なくなったのだからゆったり保育すればいいのに、何も幼稚園と保育園の子どもを一緒にして保育することはないのではないか。ぎりぎり20人くらいになるまで、それぞれのニーズに応じた対応をして、落ちついた形で保育していけばよいと思う。

c. 日本の保育は今、机に向かってとか、教え込みなど学校的になってしまっているところがある。今までの既成概念、子どもは多いのが当たり前だということを維持しようと思っただけで合体になっていると思う。だから、そういう意味での意識改革をまず考えるべきだと思う。発想転換をして、できるだけ小規模にしよう、分けていこうという方向で。子どもは地域の中で育つということが大事だから、そういう意味ではこれからの保育のあり方を考えるとき、今の保育は、閉じられた形になってしまっている。園の中で自己完結する保育をしてしまっている。保育というのは、やはり地域に開かれて、できるだけいろいろな行き来、交流ができるようにしようと思えば、あまり大きな単位だと動けない。小さな単位だと、散歩に行き、そこで地域の人達と交流できる。これからは、園の中にも地域の人達に来てもらうというような、そういう開かれた保育が必要になってくる。地域づくりの中での保育園の役割は大きいと思うが、そういうことをしようと思っても、規模が大きくなると、「あそこは教育する場」みたいになって、囲ってしまって外から入りにくい状況になってしまう。そういう意味で、こういう形の合同保育というのはやはり良くないのではないか。

④合同保育の進行に対する対策と目的

a. これからは、女性が働き出すと、子どもはみんな長時間保育園で生活するのが当たり前になってくる。幼稚園のニーズが少なくなっても、幼稚園は幼稚園タイプで、保育園は保育園タイプで、しばらくは規模を小さくしながら、地域で保育する。どうしても仕方がないところでだけ、合同保育をして、小さなクラスの中で合同保育をする。そして、子どもは午後必要に応じて降園していくようなタイプでやっていけば、ごく自然な形ですすめられるのではないかと。やはり、人数が多いとどうしても管理的にならざるを得ないのでよくない。

b. (保育室、保育者の関わり方など、よりよい保育が保証されるのなら合同保育でもいいのではないかと) ということに対して) 子ども一人ひとりの育ちを援助していくという姿勢に立てば、保育者の役割としては、子どもに安心感、信頼、安全、安定感を与えることがあり、そういう雰囲気作りがまずある。そして、生活基盤がしっかりしていて、その中

から子どもと一緒に知的な側面もあそびを通しながら、子どもの興味関心を中心にして、自分たちで一緒に探求していくような保育、子どもにとって今何が大事で必要か、どういふことを一緒に考えていったらいいかという創り上げていく保育、そういう保育に発想転換できれば、ごく自然な形で子どもが入り込めるし、途中から（お昼寝になって）帰っていても、ごく自然な形でできるような保育になるのではないか。だから、一斉保育で、幼稚園スタイルで保育するのは、保育所の子どもにとって無理がある。そこが基本的な問題ではないか。保育園を基盤に保育していくという発想に転換しなければならない。

⑤ 幼保一元化についての考え

a. 将来的には幼稚園と保育園の需要が流動的になるので、私が行政の一元化と言っているのは、「現場がもっと一体化しなさい」ということではない。需要が入れ代わるので、幼稚園と保育所の管理が別々になっているとなかなかうまくいかない。やはり、そういう意味では、地域全体を見渡せるところに、窓口は自治体レベルで一本にした方がよい。地方分権化になってくるから。それぞれの地域の中で、地域の子子ども達をどういふふう配慮して、保育していったらよいかというのは、幼稚園だ、保育園だといっている場合ではなくて（子ども課と呼ぶのかどうか）、家庭にいる子ども達のこと配慮した、行政的な一元化をして、保育施設の適切な配置ができるようにしていく必要があるのではないか。そして、できるだけ小さな単位の保育ができるように、システムを作り替えをしていく必要があるのではないか。今の制度の枠組みの中で、できるだけそれを維持しようとしてあくせくしているところの問題が出てきている。

この実態（前回の調査研究のまとめ）を見ても、幼稚園に行っている子どもでも3分の1が母親が働いている家庭から来ていた。だから、そういう意味では実態としては、保育園が必要な子ども達なのだ。行政としては、だから施設を一体化していこうという発想が出てくるのは当たり前だと思うのだけれど、そういう意味でも行政の壁は崩さないと、限界が出てきているという姿ではないかと思う。それを、保育所、幼稚園という枠組みや制度をそのままにして、何とかくっつけようとするところの無理が現れてきていると思う。厚生労働省と文部科学省がなかなか一挙にはうまくいかないかもしれないけれど、自治体レベルではこういう無理な形ではなく、少し柔軟な形の保育、流動的な地域内での分散というか、小さい形に分けるといふ保育（幼保一元化した小さな保育施設は新たに「子どもの家」と呼んでもよい）は可能ではないかと思う。そのためには何をどういふふうにしたらよいか、何を研究していかなければならないかという問題が出てくると思うのだが、まずは、バスで子どもをかき集めてくる保育は止めよう。幼稚園でも生き残りをかけて、いっぱいあちこちの子どもを集めてくるという、大規模な園が残っていくというシステムになってしまっているところがあるけれども、結局地域の園が閑散化していったら、その園だけが太ってしまい、そこも最終的には崩れていくという形になってしまうと、地域の保育環境が崩壊してしまう。園の規模をまずは限定し、定員を何人までというのをまず決め、クラスの定員を小さな単位にしていくという方向を追求することが大事ではないか。小型化と、身近な居住地域での保育を原則にする。

b. 働く女性は、一生懸命働かないと自分の職がなくなるというので頑張るし、企業側も子持ちの労働者はコストがかかるので特別待遇はしないという矛盾から、保育所は長時間保育をせざるを得ない状況になっている。今、移行期の問題として、いろいろ複雑な問題を抱えているが、働く条件が整わないと女性が社会進出できないので、保育所側がそこをカバーしていかざるを得ない状況にある。女性の社会進出が定着すると、幼稚園の需要はどんどん減ってくるので、保育の方の一元化でも筋を通していけると思うのだが、まだ今はアンバランスなところで、幼稚園側が必死になって体制を維持しようと、預かり保育を試みたり、子どもをたくさん集めて合同保育をしたり、一斉保育をしてしまうという、民間の経営に依存している日本の体質があると思うが、無理があるのではないかな。

日本でも年金問題から個別課税の議論が出ているが、そこを解決したら、とたんに女性は扶養家族でなくなり自分で働かざるを得なくなる。スウェーデンも同じだった。若い女性が今どんどん社会進出しているが、雪崩を切ったように変わってくると思う。そういうことを見越すと、必死になって、幼稚園、幼稚園と幼稚園の体制を維持しなければならないということは、幼稚園側が保育所に発想転換すればいいと思う。そこは、厚生労働省としてはお金がかかるというので、民間に民間にというように、退いているところがあると思う。お金をそれほどかけなくても、まず今はボランティアに呼びかけて、家庭にいるお母さん達の力も上手に引き出しながら、あるいは元気な高齢者の力も引き出しながら、地域の中で保育園を支えてもらう。

今や家庭にいる親子も支えていかなければならないと、政府も発想転換したので、保育園が家庭を支援しなさいと言っているけれども。オープンになって支援体制を保証しながら、家庭の子育てを援助していくと親も子どもも安定してくる。そのような母親達がお互いに支え合いながら、家庭保育室なんかを上手に運営できだすと、地域のお母さん達が元気になってきて、地域自体が活性化してくる。ちょっと発想を変えると、少子化だからと子どもをかき集めなくても、分散して小さいところで、お互いに支え合いながら、コミュニティをつくっていけるのではないかな（スウェーデンでは、1960年代後半～70年代に、現在の日本と同じような状況を経験した）。スウェーデンでは安定的に保育所は今も増えている。

(5) 森上史朗氏

①前回の調査研究に関する意見

a. 合同保育をどういうふうにか考えるかということだが、園により幼保の関わりの実態は実に様々であり、どういう経緯で合同保育が始まったのかということも、それぞれみな違うわけである。例えば、A町のB幼児教育センターというところでは、町長が、同じ町の子どもなのに、分け隔てをして育てるといのはおかしいのではないだろうかということ、保育料まで無料にして始めたわけである。そこで、今までは幼稚園の所属になっているか、保育園の所属になっているかということは親も知らないという形だった。しかし、新しい町長は、それをはっきりと親にも知らせるとい形に変えた。また、もう一つの例としては、小さな町村で、保育園と幼稚園とを両方やっていくのは大変なので、経済的理由から一緒にするといところも多い。幼稚園の方が安上がりだとか、保育園の方が安上がりだとかとい経済的な理由だけでやっているところもある。このように、合同保育を始めた経緯や動機はいろいろある。そして、保育のやり方も一つ一つの園でみな違うわけである。幼稚園でも、保育園以上に養護という面に気を遣っているところもたくさん見てきたし、逆に、保育園の方が管理的だといところもあったりして、幼稚園だから保育園だから、といことでは一概に決めつけられないといふうに思っている。

また、C村では、今まで幼稚園と保育園の両方あったのだけれども、今度、保育園を4歳までにして、5歳は幼稚園にしてほしいとい、親の要求があった。それは、学校へ上がる前は教育を受けさせたいといような誤った保護者の希望があたりする。その典型は沖縄県だと思いが、5歳になったら、保育園から全部幼稚園に変わるわけだ。兵庫県もそういうところが多く、特に神戸市などがそうだ。だから、そういうところでは、幼稚園のことを「学校」と言っており、親の意識として、学校に行っているとい意識がある。だから、教育といことを際立たせるといこともないわけではないと思ふ。ただし、そういうことをできるだけ排除しようとしてやっているところもたくさんある。だから、前回の研究において、実験群と統制群に分けてグループ間の違いを統計的に分析したといことは、いろいろなものを平均化し、相殺してしまっているのではないか。必ずしも、パーセントで差があるとか差がないかといようなことではなく、これだけの資料を統計的に処理されたが、本来はもうちょっと細かくその園の保育のやり方と関連づけてやっていくべきではないか。

例えば、幼稚園の「預かり保育」といことには問題が多く、いろいろな預かり保育を見たが、居残る子どもに対して細かい配慮をしているところと配慮していないところがある。例えば、D町では、実に細かい配慮をしている。一旦幼稚園からみんな一緒に出て行き、それから居残りの子どもだけが別の門から入る。そして、場所も同じにならないようにと保育室は使わないといことで、別に場所を作っているといように、かなり気を配っているところもある。逆に、そうでないところもある。だから、そういう配慮をしているかいないかといようなこととの関係を細かく見ていかないと、合同保育の方がいいとか、そうでない方がいいかといような結論にはならないように思ふ。

b. 性格検査での比較というのがあったが、確かにそういう傾向があるのかもしれないけれども、先ほどの内容とも重なる問題があるように思う。

合同保育というものが大規模になっていくということと、それからこれからの保育園での保育が非常に難しいと思うのは、一時保育、緊急保育のような問題がいっぱい出され、それにどう対応したらよいかということだ。

c. 保育というのは、一日の生活の流れに脈絡があって、人と人が織りなす物語として流れ続けているわけだから、保育園の子どもが保育園児でかたまるというのは、当然ではないかと思う。というのは、幼稚園でも保育園でも、子ども達は「明日あれをやらうぜ。」などと言って帰っていくわけだ。そうすると、終わりの方に、そういうことをやっていたグループが勢いそういう仲間が集まってそれをやる傾向があるというのは当然のことではないか。そういう保育というのは、一日の中でも繋がっているし、一日だけでなく、繋がっているある種の物語が、様々な出来事が起こりながらも流れていると思う。そうすると、合同保育の時だけその流れから切り離れた生活になるということになると、そこら辺の対応が難しいから、こちらが用意したものを与えるということが多くなりほしくないか。

d. これは、非常に心理学的な研究になっている。

e. 幼保別の保育と合同保育とどちらがよいのかを聞いているが、例えば、A町では、一体化施設しかないわけだから、どちらがいいですかと親に聞いてみても、比較のしようがない。そこら辺を聞くときに、そういう他と比べて回答するのかどうかということ、回答の持つ意味が非常に違ってくると思う。それと、「寂しい」、「寂しくない」というようなことを外見的な行動を見て回答しているのではないだろうか。しかし、心の内面というのは一見なんか平気そうだけれど、すごくけなげに振る舞っているかもしれないし、そこら辺をどう見たらよいのか。もっと質的な追求ということが必要ではないか。保育園に長時間居残る子どもの寂しさを、どのように考えたらよいのかと思った。そこらあたりのことをとらまえるのが難しい。

f. (幼稚園児が先に降園していくことに対して、保育園児が感じる寂しさについて) 後まで居残る保育園児が寂しいと感じるかどうかは、どのような保育をしているかという「保育の質」と関係している問題だと思う。早く家庭に帰った子ども達は好き勝手にジュースを飲んだり、お菓子を食ったり、テレビを見たり自分のやりたいことができる。もちろんそれ自体に問題(「家庭保育の質」)はあるけれども、居残りではそれができないということがあるわけだ。けれども、子どもにとってはどちらがいいかということは単純には言えないのだが。

30年前に延長保育が始まったばかりの頃は、大体一部屋に集めてテレビを見せておくというようなことが一般的だった。そういう中である保育園では、それでは子どもがかわいそうだということで、一人一人の子どもがやりたいということをしてできるだけ保証するとか、町に買い物に連れて行くとか料理を一緒に作るとかそういう保育をしたところ、かえって、子どもは居残りの子どもをうらやましいと思うようになった。だから、どういう保

育をしているかという保育の質とも非常に関係してくる問題のように思う。子どもがどのように感じているかということは、つまり家庭でどういう生活をしているかとか、親とどのような生活をしているかとか、保育園の保育がどうであるかというようなこととの関連で捉えていく必要があるかと思う。

②継続研究に対する示唆

a. ある町の幼保一体化施設であるB幼児教育センターでは、ノーマライゼーションという考え方を根底にして進めているが、町の人たちは日本全国そういうふうに行っているのではないかと思っており、親も自分の子どもが幼稚園か保育園か自分の子どもの所属は知らない。それとは違って、F町の場合は、幼稚園か保育園かは親が選択をしている。G町では、親が選択をするのだけれども、保育の理念で選択するのではない。幼稚園は冬になると送迎のバスが出るので、送迎してもらえということが一つの魅力になって、それが選択の中心的な理由になったりしている。このように、一つ一つの園や地域がどういう経緯で合同保育を始めたかとか、それから親はどのような理由で選択しているのかというようなことが、はじめはなかなかわからなかったのだが、いろいろ聞いていく中で、そういうことがわかってきた。同様に、保育についても、そういうようなことを聞いてみるとか、どのような考え方で、どのようなふうに行っているかというようなことを細かく見ていかないといけないということがわかってきた。そういうようなこととの関連で、それぞれの園の違いが出てくるのではないかというふうに思っている。そういう意味で、今度事例研究をやるということなので、是非その点をしっかりと見てほしいと思っている。

b. (前回の研究がきわめて心理学的なアプローチになっていたと思うので) 私は、保育を専門にしているのだから、絶えず保育の日常、毎日流れている保育のことがどうしても頭に浮かぶ。そういうことをもう少し入れていただきたい。例えば、合同保育になるとき、突然にその活動が与えられるのではなく、活動するきっかけというのはどのようなふうにしてその活動に入ったのかとか、それから保育者がどのような配慮をしながら、例えば、そこでの指導計画はどのような形で考えられていたのだろうかとか。そういうことがいろいろあるわけだから、それらをよく見て取り入れるべきだと思う。

普段の保育の中では、保育は生活の流れの必然性に基づいてある種の物語として流れているのだが、合同保育では、それができにくいという条件がある。それをのり越えるための戦略が必要だと思う。だから、合同保育を行っていても、あまり考えないで保育をしている場合には、こういうことが起こりますよという、そういう示唆がつかないと、それが合同保育そのもののせいになってしまうと思う。

c. 事例研究は重要である。しかし、悪い事例はなかなか書きづらい。事例として出していく時、それは問題だよという事例を一つの事例で出すのではなくて、こういう事例も、ああいう事例もありました、というようにもっていくやり方もある。それから、その中で共通する問題があるわけだから、そういうものを括りだしていく。

d. だから表面的なインタビューでは本質に迫ることは難しい。私は、こういう調査をするときには宿泊して、夜でも役場や保育園の人達とゆっくり話をするようにしている。インタビューするときも、役所の人とインタビューするのと、園長先生とインタビューするのと、保育者とインタビューするのとで結果はかなり違う。合同保育に対するそれぞれの評価も全く違うので、全部別々にやってみる必要もある。それから、本音が出るような話し合いの場を設ける必要がある。アンケート調査で本音の部分を知ろうというのは無理だから、インタビューをしないと本当のことは見えてこない。実態を知るためには、時間をかけないと無理である。最初は、いくつか粗く見て、そしてここはじっくりと見てみようとか、ここはもっとよく見てみようというように、ピックアップしてみる。

e. 幼稚園と保育園、両方つくとお金がかかるから、一体化施設を作った方がいいのではないかというようなことがいろいろある。だから、そういうことに対して、そういう安易なことでは子どものための保育はできませんよということを、指摘して欲しい。それなりの理念があって、本当にチャイルドファーストということで、子どもの最善の利益を考慮してということを考えてやっていかないとだめだということだ。

④合同保育の進出に対する対策と目的

a. スウェーデンでは、地域の中で子どもが育っていくということが前提になっているので、20～30人が保育施設の一般的な規模になっており、それが町のあちこちにあると聞いている。ところが、日本では、合同保育が今一番多く行われているE県では、経済的効率の視点のみから、合同保育をすすめたり、幼保一体化施設を作っている。たとえば、F町の幼保一体化施設では、バスを何台も使って、町の子どもを中心部に運んでくる。建物は立派だし、それから保育者も今までは休暇が取りにくかったけれども休みが取りやすくなったとか、研修に出やすいとかいうメリットはある。しかし、それが果たして子どもにとって、地域にとっていいのだろうかという疑問をもっている。建物は立派だし、表面的にみるとなんら問題がなさそうだけれども、保育の本質から考えると大きな問題がある。つまり、日中、地域から子どもがいなくなる、子どもの声が聞こえないということはいったいどういうことか。やはり、子どもは、地域に見守られながらその中で育っていくことが大切だと思う。

そして、規模が大きくなると、どうしても家庭的な雰囲気というものがなくなっていくというように思う。だから、もし合同保育をやるのだったら、養護的な環境への配慮が絶対必要だと思う。今の合同保育園をみると、その辺の配慮が少な過ぎる。そうすると、お金がないのでやれないという声がかえってくるが、それは単にコストだけの問題ではないと思う。30年くらい前だけれども、M保育園でやっていたことは、本当にこれくらい家庭的な保育園はないというくらい家庭的な環境で保育をやっておられた。障子とか、屏風とか、衝立とか、カーテンなどを上手に利用するのだが、時には子どもと一緒に作るとか、時には家庭のように個々の子どもの要求を満たしてやりましょう、場合によったら、子ども達をつれて町に買い物に行くとか、そういうこともやっておられた。そういうような配慮が少なくなるのであれば、一体化施設を作ったり、合同保育をやる意味がないだろうと

思う。

b. 午前中を教育で、午後を保育というような考え自体が、そもそもおかしい。保育指針にあるように、養護と教育は一体化しているということ、子どもの生活はトータルなものとして考えなくてはならないと思う。そういうことからすると、午前中幼稚園で午後保育園という考え方は、絶対おかしいと言わざるを得ない。

どこまでも、子どもの立場に立って考えようということを、世界の「児童権利宣言」などでもいっているわけである。子どもの立場に立って考えたとき、子どもは一日の生活を通して、最初は楽しかったけれど、一日の終わりの方でなんかひどく嫌なことがあったとしたら、その一日が嫌なものになってしまうわけだから、トータルな「一日」として、子どもが幸せだと感じるようにしていかなければいけないわけだ。だから、一日の保育の計画というものは、そういうふうを組み立てなければならない。だとすれば、午前を教育、午後を保育というように、組み立てられるべきではない。午前中を幼稚園、午後を保育園という考え方は、結構あちこちで出てきているし、素人はだいたいそういう発想をするが、それは絶対おかしいと思う。

朝、目が覚めたら、幼稚園とか保育園に行きたいという思いで来て、そして、そこではいろいろトラブルもあったりするが、帰るときにはやっぱり明日も来たいという思いで帰れるように仕組むとしたなら、本来的には、延長保育の先生がローテーションで変わるということもやむを得ない面はあろうが、子どもにとってはそれでいいのかどうか問題もある。保育者の人権というものもあるから、それはやむを得ず担当が変わるということになっているわけだけでも、そののところもやはり工夫しなければならない問題があると思う。正規の保育の部分と延長の部分と繋ぐというその引継ぎきちんと行われているかどうかとか、必ずその子の一日の生活をとらえて考えられる人がいるかという形で、トータルなものとして考えていくというのが、子どもの最善の利益を考えた保育だろうと思う。

c. 保育は一日の中で繋がっており、生活の流れや人と人が織りなす物語として流れていると思う。しかし、合同保育ということになると、往々にして、こま切れになってしまう。だから、そういうことへの配慮をしない合同保育というものは、問題が残ると思う。合同保育をやるとしたならば、そのことに対する戦略という点では、すごく細かい工夫が必要だろうと思う。

d. チーム保育ということが、幼稚園では、今後2、3年の目玉として強調されることになるが、クラスを越えて、フリーの教員を入れるという中で、チーム保育を一般的にしていこうというのが、幼稚園のこれからの施策になっている。しかし、チームワークがよくなく、共通理解が悪いと1+1が1以下の力になることもあれば、逆に、1+1が2以上の力を持つことさえある。合同保育は、まさにそういうことだと思う。合同保育をしている場合、保育者のチームワークがどれくらい打てば響くような関係で行われているかどうかということが、影響してくると思う。

⑤幼保一元化についての考え

a. 基本的には、同じ日本の子どもなので、保育に欠ける欠けないということで、その子どもに対する処遇が違っていいということはないと思う。ただし、今の状況と歴史的経過の中では、保育に欠ける子どもを保育園で保育してきたということは、ある意味では日本の全体の子どもに対する手だてとして、大変プラスになった面が大きいだらうと思う。先進国の中では、日本は全ての子どもに対する保育というのは手厚く行き渡っている、ほぼ99%の子ども達が何らかの意味で保育を受けている。けれども、その中で、幼稚園と保育園というものが対立し、競合してくるようなことがいろいろあったので、そのこのところの垣根を低くしていかなければならない。

もう一つは、真の意味の地方分権化というのが、地域の子どもを地域の中で育てるということを考えたときに、今までのような日本の歴史の中でずっと続いてきたような幼稚園とか保育園が、今後ずっとそのままいくとは言えない面もある。場所によっては、一体化施設もあっていいだらうし、過疎地や待機児があふれているような地域では、保育園の中で保育に欠けない子どもを処遇するとか、幼稚園の中に保育に欠ける子どもをみるというところがあってもいいだらう。しかし、その場合も、単にそれが経済的な効率がよいということではなくて、子どもにとってそれが最善であるような工夫をしてほしい。

それから今の社会的状況を考えてとき、保育園にくる子どもだけが、必ずしも保育に欠ける子どもだとはいえない。保育に欠ける欠けないの線引きが非常に難しいというふうにする。ある点からいうと、日本の子ども全部が保育に欠けると言ってもいいかもしれないわけだ。本当に、親が孤立した中で保育をするということからすると、本当に適切な親子の対応の中で保育ができていくというふうには思えない。また、動物を飼ってはいけないとか、家にいると勢いテレビばかり見るとか、そういうことがいろいろと多い現実の中で、保育に欠けるか欠けないかの線引きは非常に難しくなってくるだらうと思う。

多様な保育施設があってもいいように思うけれども、そのとき、幼稚園と保育園がお互いに対立するのではなくて、相補うような関係がとても大事ではないかと思う。だから、もし、幼稚園と保育園が別々に存在するとしても、これからは、ノーマライゼーションということが基本となるというこれからの国際的な理念を考えたときには、やはりできるだけ、地域の中で交流をもつようなことが必要になってくるだらうと思う。保育者の交流も必要である。だから、必ずしも幼保の合同保育だとか、一体化施設ということだけではなくて、もっともっと幼保の相互交流というものが頻繁になされるような施策が必要になってくるのではないかと思う。

b. (一つの形態として、経済的効率ということではなくて、子どもの最善の利益という観点から、合同保育も必要な地域もあるだらうという先ほどのお話についてのお考えをお聞きして) 幼保の関係については、文部科学省と厚生労働省との間で、対立してきたという歴史的経緯がいろいろある。教育と保育は違うんだということをいろいろ言ってきたところもあるわけけれども、その時代はもう終わったと思う。国際的に、もう「アーリー チャイルドフッド ケア アンド エデュケーション (Early Childhood Care and Education)」とあって、ケアが必ず入っているということが国際公用語なのだという

こと、しかも教育と養護は別々のものではなくて一体化したものであるということが共通理解となっているわけだ。今、日本保育学会はじめ、いろいろなところで、養護と教育は分けられない、だからこれを保育という言葉で表しているというようなことは、ある意味では、専門家の間では定着していることだ。だから、午前中を教育で、午後を保育だなどというように考え自体が、そもそもおかしい。

c. 基本的な考えからすると、今まで幼稚園と保育園が競合してきた歴史があるから、これからは協調していかなければならない。そうすると、一体化施設にするのがいいのか、あるいはもっと他のやり方もあるだろう。E県では、人事の交流を積極的にやっているし、できるだけ一緒の敷地に保育園と幼稚園を建てるということもやっている。そうやってみると、お互いにもあまりにもお互いのことを知らなさすぎたというようなことがいろいろ起こってきている。保育園の保育者はとても大変なんだな、休みはないし、ローテーションで顔を合わせることも少ないなど、良い悪いではなくて、お互いにそういう事実をあまりにも知らなかったということがいっぱい起こってきている。だから、保育園と幼稚園とが対立したり、競合するということは良くない。幼稚園だろうと保育園だろうと、保育の本質というものはこういうものだという考えでやっていかなければいけないだろうし、同じ日本の子どもから、長時間とか短時間の差はあったとしても、そこで子どもの発達を促すという経験が違って良いはずがないと思う。

そういうことを考えたときに、それでは全て一体化施設にしなければいけないかと言ったときに、そうではなくて、やはり、厚生労働省と文部科学省の共同の行動計画（平成12年）の中で、研修とか人事の交流とか養成を一体化してやろうということが掲げられているが、それを絵に描いた餅に終わらせない実行性をもたせることが必要だろうと思う。

E県の多くの地域では、幼稚園と保育園の両方につくれないというところがある。人口がだんだん減ってきているので、勢い一体化施設になるのかもしれない。そういう所は、ある意味では一体化施設であってもいい。また、ノーマライゼーションの考え方でやっていくところもあっていいのではないかと思う。

d. (幼保一元化の根拠として、スウェーデンやフランスは全て一元化であり、それも教育の方に統合されてきているのが世界的な傾向で、先進諸国の中では二元化されているところはもう少ないという指摘が他の有識者からあったため、そのことについてのお考えを伺った) 今までの歴史の中では、日本では二元化であったことにメリットがあったと思う。イギリスとかアメリカに行くと、デイナースリーはどちらかというと貧困対策だから、中産階級の人達で、ワーキングマザーというのは自己責任でやっているわけだ。そういう意味では、日本では保育所というものができて、そのために全ての子どもに対するケアが行き渡ったという点では、今まではとても良かったと思う。しかし、これからはずっと分かれているままで良いかということには議論がある。行政が教育に一元化されるということが手放して良いとは思われない。これとは別に、昔から論議があり、児童省などというのがあって、そこで一元化された方が良いという話もあるから。ただ、スウェーデンは今までは、あまりにも託児ということだけで考えてきたわけだから、そこに教育的な対応も入れる必要があるということだろう。先にも触れたように、「保育」ということが、国際

公用語として、ケア・アンド・エデュケーション (Care and Education) ということで、ケアとエデュケーションが入っているということで、エデュケーションも考えなければいけないということで、教育省の所管に変わったという面があるのだろうが、日本はそれと必ずしも一緒ではないように思う。すなわち、単純に文部科学省にすればよいというようなことだけでは、教育のほかに現在のように保育要求が多様化することにどう対応するかという、「養護」の面への配慮がどうなるかという問題もあり、それをどうしたらよいか。

それから、フランスでは、年齢で分けていて、クレッシュとエコルマテルネルと分けている。だから、エコルマテルネルは一応文部省の所管というようになっている。フランスの場合が一つのヒントになるのではないかという話が研究者の間ではよく出てくる。というのは、早く帰る子どもと遅く帰る子どもが、エコロマテルネルの中に一緒にいるというのだけれど、最近フランスから帰ってきた人に聞いたところ、働いていようが働いていなかろうが、今はほとんどが長時間だということになってきているという。

ドイツでは、ラント (邦) によって違うが、ヘッセンのキンダーゲス・シュテッテでは、学童もみんな一緒だから、とにかく朝もそこに来てから、学校に行く子もいれば、キンダーゲス・シュテッテにそのまま残り保育を受ける子どももいて、それこそ幼保一元化施設である。それから、学童はまた、「ただいま」と帰ってきて、夕方までそこにいて、そして家に帰っていく。それで、キンダーゲス・シュテッテの中でも、早組と遅組があるけれども、それがごく当たり前だということで、歴史的に位置づいているのだが、そこでは、早組と遅組とが一緒にいるということが、何故問題なのかという感じなのだが。私は、それが一番気になって質問したが。本当は子どもの中に何か寂しさとかそういう気持ちがあるのに、それをあるいは見落としているのかもしれないけれども、その点は研究してみないとわからない。

(6) 大場幸夫氏

①前回の調査研究に関する意見

a. 実験群と統制群という形で、保育形態の違いから対比された資料でこの結果を見ると、読み手として、空白のような印象を受ける。5つの園の常態像として、合同保育の一日の流れとか、登園してきてから降園までの間の子どもと保育者の動きとか、関わりとか、生活の節目節目とかがあるのだろうが、それが見えてこない。

この報告書を読んだときに知りたい一点というのは、A園～E園までの各園の実際の具体的な生活の流れである。調査結果に何点か現れてくる子どもの行動特徴というものが、根拠となる生活の具体的なエピソードと対応してくるところが当然あるだろうと思う。その対応関係がある意味では、これから検証するときに非常に欲しい資料である。なぜなら、実験群と統制群という条件の対比という形でくると、対比的なデータとしてこういう結果を生んだということと、それが5つの園をサンプリングして、それらの園のそれぞれの流れの中で、自己主張の少なさというようなことが現れてくるということが繋がってくれば、それが欲しい資料である。

例えば、早く帰る幼稚園児を保育園児が見送る、そのことの寂しさということが書かれているが、根拠として、その記録の中でその寂しさということを符合させていくことができれば、合同保育の実態がはっきり見えてくるのではないか。保育研究者にとって、貴重な資料であるということ考えた場合に、どうしても必要なものは、合同保育の中身、すなわち、登園から降園までの間の時系列毎の展開だけでなく、それに付随する関わり、それに付随する保育内容の組み立てというものである。今回の調査では、出てきた子どもの行動特徴と具体的な合同保育の実態との符号がなされていない。そういう符号が出てくれば、きわめて重要な指摘となるだろう。

b. 自己主張の抑制こそ問題だという指摘は、まさにその通りだろうと思うが、それは、合同保育か、あるいはそうでないかということよりも、一日の保育の流れの中で、一斉保育という形態の中で我慢させられる場面があるかどうかということによるのかもしれない。それは教育強化というところに現れてくるのかもしれない。

c. 合同保育を実施している地域の意識や実情は、アンケート調査では漏れてしまう。

d. 合同保育が子どもに与える影響を普遍化した資料というものを取り出すのは無理である。合同保育園で何が起きているかということは言えるけれども、普遍化した資料というものは出てこない。

②継続研究に対する示唆

a. 子どもに負担のかからない合同保育の前提条件は何かということを確認していくために、事例研究法によって、ていねいにみていく必要がある。合同保育の中で憂慮するものが、前提条件が違くとそれを避けられるということ、具体的にローカルな事例によっ